

和牛試験場だより

梶 並 嘉 芳

ことは、好天と適当な雨量に恵まれて、場内の草立ちや飼料作物の生育も極めてよく、その刈取りや、冬への貯蓄に毎日追われ、嬉しい悲鳴を上げている昨今です。

さて、今回は、昨年度実施しました試験研究の結果と、ことし実施している試験の現在までの経過のうち、主だったものの成績を簡単にお知らせいたします。

▼産肉能力検定試験▼

まず、第3回の産肉能力検定として、昭和37年12月より昭和38年11月にかけて、間接検定法により苫田郡で現在も活躍している、種雄牛土屋2号と、現在県内で、最高令であって、和牛試験場に繁養している第1大町号の産子6頭ずつについて検定を行いました。

この結果を簡単に紹介します。まず、1日当たり平均増体量は、土屋2号の方は、0.76kgで、産肉能力判定基準でみると、中位の成績で、第1大町号の方は0.81kgと上の部類でした。特に、第1大町号は現在同じ方法で各地の畜産関係機関で実施している成績とくらべてみると最高の成績に入っております。

さらに、屠殺解体して肉質をしらべたところ、土屋2号の方が第1大町より僅かながらよい結果でしたが、枝肉歩留りはどちらも中の部類でした。従って、これらを総合して産肉能力をみますと、土屋2号は中の上位、第1大町号は上の部類という結果となりました。

▼ホルモン剤による試験▼

肥育ホルモン剤による試験を一昨年行ったところ、増体、エサの利用性、肉質などに好結果がえられたので、昨年も第2回の試験として、2種類の肥育ホルモン剤について追試験を行いました。

その1つの方は、ヘキセストロールと、スチルベ

スチルベストロール系の商品名、スチンプランツを、同様に75日間隔で、2回埋没して、3次の試験牛でその効果を試験した結果では、増体状況はさきに申したものと同様20%程度埋没の方がすぐれており、さらにエサの要求率は30~40%程度よくなり1kg増体に要したエサ代は約20%程度埋没しないのにくらべて節約できました。また

増体状況は、ヘキセテスを埋没した方が、22%良かったが2回埋没によって増体効果は、昨年の1回埋没にくらべて、僅かながらその持続効果を延長できる程度でした。

さらに、エサの要求率は、一般のホルモン剤と同様約20%程度よくなりました。また、1kg増体に要したエサ代も約20%程度の節約という結果がえられました。

次に、もう1つのスチルベ

これには、精神安定剤のトランキライザーを、と殺100日前から毎日2.5mgずつ内服させたが、前年度程効果は認められませんでした。

▼現在すすめている試験▼

現在行っている試験の主なものの現況を簡単にお知らせすると、まず、将来の肉牛の方向として、経済性の高い家畜にするためには、粗飼料、特に草で飼えるという点、さらに管理労力のかからないという肉牛のいいところを極力生かし、さらには経営規模をできるだけ大きくするという観点から、少くともある程度企業的な省力多頭化にならざるをえないという見通しです。

そこで、その省力多頭飼育のための管理方式、施設、肥育の仕上りと、経済としての労働報酬などの問題点を解明するねらいで、現在阿哲郡哲多町新砥地区の人工造成草地2haに、放牧追込方式と必要な草を刈取って与える追込方式による若令去勢牛と

岡山畜産便り 1964.08

の比較を10頭の牛を使って12坪の開放式牛舎で試験を進めております。

その現在の成績とその概況は、すでにいくつかの新聞紙上で報道されているが、4月15日に開始して、現在丁度100日間経過しています。その間の1日当り平均増体量は、放牧追込方式の区が、0.87kg、刈取り追込方式の区が、0.78kgと、一般の成績と比べてみてどちらも極めて順調な増体成績を示しています。

今、暑い盛りですが、幸い牧草地の夏枯れもなく、牛の夏バテもないようで、このままで涼しい秋にはいることができるのではないかとの見通しに立っております。夏枯れ対策としては、牧草を1部乾草として与えることにしております。

これからの和牛子牛生産地では、生産農家が広い牧野を利用して、子牛を放牧して、一定の大きさまで育成するという行き方が、ぜひ必要と思いいこれには大へん良い展示牧場と自負しています。振って現地を御覧になって下さい。

次に、最近の子牛の値段の安いことは、生産農家にとってきわめて重大な問題となっておりますが、特に並以下のめす子牛の安いのが頭痛の種となっております。こうした状況のもとで、並以下の繁殖に向かないめす牛を、若令肥育して、生産農家に利益をもたらすことをねらいとして、試験をしております。

一般にめすが去勢より飼いやすいので、めすの若令肥育の方法は、去勢牛のそれと違った点があると思われまますので、それらの問題を究明するため、6頭のめす牛を使って、試験区は、一般の去勢牛の若令肥育より濃厚飼料の給与率を下げ、対照区は去勢牛の場合と同じ給与率として、4月9日より試験を開始して、現在106日を経過して後4日で第1期を終ろうとしております。

試験の当初数日間は、離乳直後のため、飼料の採食状況は、やや試験区の方が少なかったのですが、その後順調に生草として10%程度採食しており、一方濃厚飼料の方は、規定の給与量を残すことなく採食しております。

その間の増体状況は、試験区の方が、98日間で、1日当り平均増体量0.54kg、対照区0.68kgでまあま

あの成績を示しております。

また、発育状況はどちらも発育標準の中間値よりややよいという状態であります。

これらの試験は、来年にならないと結果は出ませんので、いずれ結果がえられましたら、遂次皆さんに知っていただくことにいたしまして、今回の筆を置きたいと思っております。